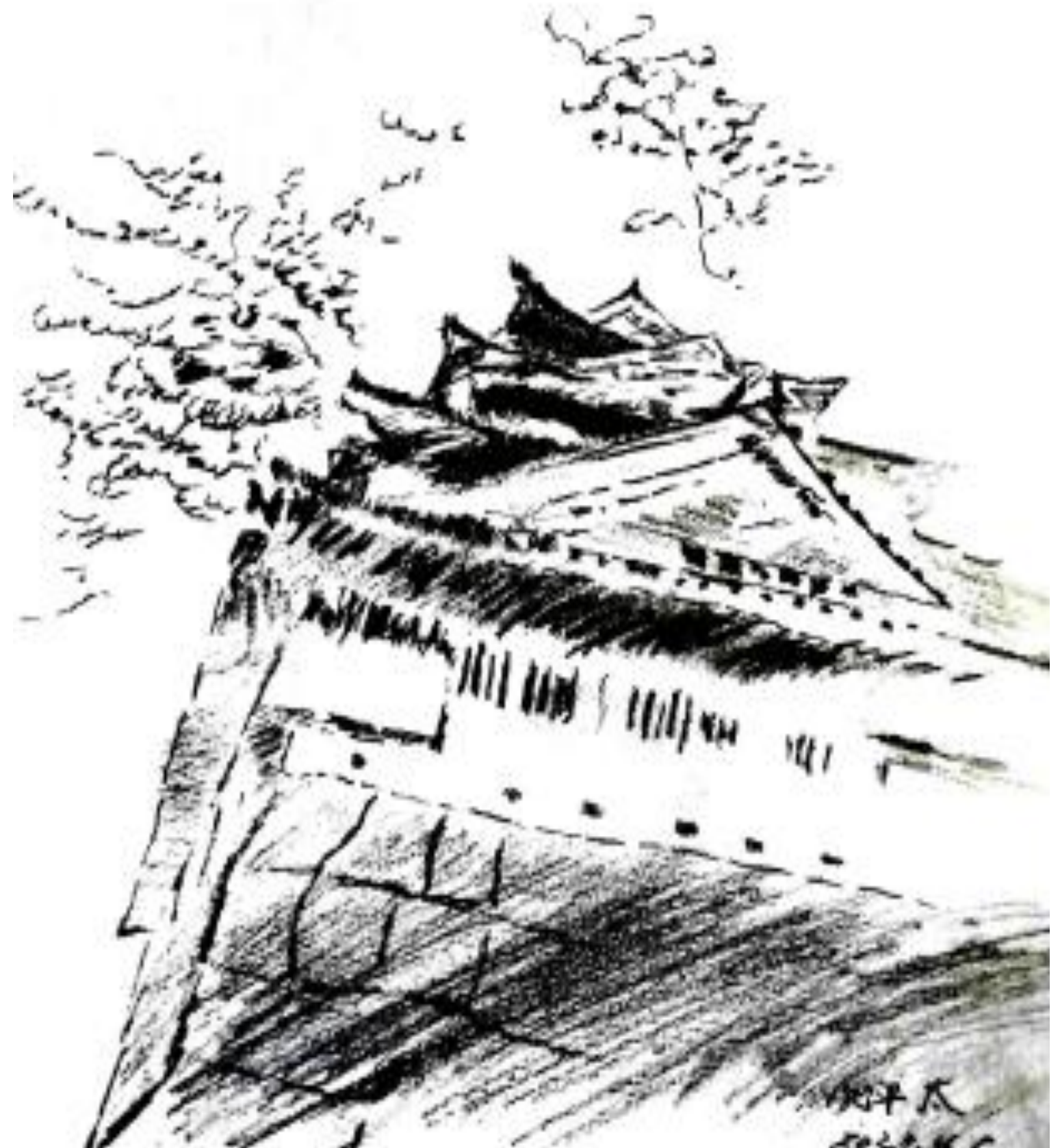


閣守天柳川

2025 年 7 月号



虎平太
2025.7.1

第26回例会 2025年6月15日(日) 投句締切分

お題 「生活」

井澤壽峰 選

足るを知る暮らしで今日も満ち足りる

物価高生活変わる年金者

沈黙が心地よくなる森に住む

大臣の生活にない米不足

生活のリズムはパートの時間

生きるのが至難の技の生活苦

現実には甘くはないとパートでも

お茶啜り今日の元気を誓う朝

るるんと気楽生活老い独り

身の丈に合った生活ゆるゆると

生活感溢れる笑顔子だくさん

父の日の小鯛ささ漬けありがとう

(五客)

佳5 順風満帆感謝の老いの日々

佳4 年金の暮し険しい物価高

佳3 クタクタの身体を癒す仕舞風呂

浜知子

松谷由夏

直子

岩原一角

蔵内歳重

美代

信子

秋田あかり

東尾由子

三枝なな

堀内きみ子

武智三成

松谷由夏

山野寿之

久世高鷺

(三才)

佳2 私生活覗かないでね秘密なの

佳1 生活にゆとり眉間に皺がない

人 非正規の暮し明日が見えぬまま

地 生活費母内職のミシン踏む

天 戦争がひそひそやって来る蹄(ひづめ)

軸 生活の糧脅かす物価高

美代

山野寿之

林ともこ

東尾由子

平川柳

井澤壽峰

(選評)

人の句

物価高の上予想外の米不足、農相の失言による辞職中古米が出現、まるで明かりが見えない。不安定な政治の中で明るい日差しが待たれる今日この頃である。

地の句

天の句に続いて思わず、戦時中の母が生活費を稼ぐ為に毎日ミシンを踏む姿を思い起こす句として選句しました。

天の句

ウクライナに始まりガザ、イスラエルと戦乱が広がる中戦の無い平和な日本にもひたひたと生活を脅かす報道が日々メディアを通じて報じられる。現在時事を巧みに句にした作者の洞察力に脱帽である。

お題 「広い」

浜脇蓬生 選

七夕の空に思いを馳せている

了見の広い男が持つ度量

母卒業私も広い海に出る

ただ広い空だけでいいかもめ飛ぶ

人手不足遊休農地また広げ

一石を投じ広がる嘘囃

ごちやごちやの妄想を盛る広い皿

楽しさと哀しさを抱く広い海

汗をかく額の広さ父譲り

立ち向かう広い世界へ好奇心

広大な空続く先では戦

広い道ばかりが続く猜疑心

(五客)

佳5 親が逝き子の旅立ちで広い部屋

佳4 苛つかず心を広く介護の日

佳3 広い部屋君の温もり今は無く

信子

井澤壽峰

美代

直子

加山勝久

山野寿之

秋田あかり

直子

春田敏晴

堀内きみ子

松島きよみ

林ともこ

蔵内歳重

松谷由夏

久世高鷺

佳2 失意の日広い青空仰ぎ見る

佳1 行間をひろげて君を受け容れる

(三才)

人 さよならと広い背広が告げている

地 一喜一憂広い世界の狭い場所

天 星空で逢っているだろふたり逝く

軸 里帰りたった一人で十二畳

船木しげ子

浜知子

船木しげ子

三枝なな

信子

浜脇蓬生

(選評)

人の句

去つてゆく男性を見送るのは誰でしょう？

別れのシーンが脳裏に浮かぶ映画の一場面

のような句です。

地の句

対比が面白い句です。

今日も世界中で無数の一喜一憂が

繰り広げられていることでしょう。

天の句

仲睦まじかったお二人でしょうか。

悲しいけれど、心が温かくなる句です。

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

いちおしの味を返礼品で知る

解散の恫喝できた備蓄米

膝笑い万博行きも思案中

凡人でよかつた妻の顔を見る

税収は増えりやばら撒き減りや国債

行列が出来てる年金月重い

クロネコのまた中元が来る隣

捨て鉢で弱者を狙う卑怯者

期待した朝採り野菜姿消す

平穩無事これが一番ありがたい

新じゃがが早く炊いてと甘え声

籠りがち世の混沌に怖じけずき

(五客)

佳5 人間て面倒くさくて面白い

佳4 たどり着く駅があるから頑張れる

佳3 最高の季節に中之島のバラ

佳2 タワマンの下に居ただけで無理心中

三枝なな

岩原一角

青空

武智三成

加山勝久

小林満寿夫

山野寿之

浜脇蓬生

堀内きみ子

佐野正邦

松谷由夏

松島きよみ

秋田あかり

林ともこ

信子

浜脇蓬生

佳1 ころころと転がり石がヒトとなる

平川柳

(三才)

人 掌をひらくと飛んでゆく運命(さだめ)

平川柳

地 はらはらと残り時間が減ってゆく

林ともこ

天 ブレーキングダンスバトルのイヤリング

美代

軸 見逃した赤信号に戻れない

真鍋心平太

(選評)

人の句

「英語で"chinman's chance"と言えば「苦力」と呼ばれた中国人には「チャンスはほとんどない」「可能性は全くないに等しい」ということだがいつの世も底辺に居る人々が同様な運命を感じていると思うと胸が悼む。

地の句

ここで言う残り時間は有りそうで無さそうだし、もう少し有るだろうと甘えもできてしまう残り時間である。けれど減っていることだけは確かだ。

天の句

ほとんど見たこともないブレーキングダンス、しかもそこで踊る人のイヤリングなどこの世に無いに等しい。それがこの句によって目の前で揺れているというマジック。

お題 「思想」

互 選

1点

2点

人が好き飽ちゃん一つ笑顔の輪
 現実には政治思想の無駄話
 米がない思想もなしの政府だな
 昭和百年思想が生んだ自由主義
 それぞれの思いぶつかる私利私欲
 思想家の頭を枯らす千羽鶴
 華麗なる思想に宿る夢希望
 こうありたいなかなかね人間だから
 賢くはないな占領をする国
 思慮深いゆえに悪知恵も働く
 何事も欲はそこそこ足るを知る
 自己肯定できてサラサラ茶漬け
 戦好きなトップがいると困る地図
 誤った思想蔓延して破綻
 目を凝らし喜び探し老いを生き
 本を読むわたし自身でいるために
 思想など無くて焼ける玉子焼き
 妄想が暴走していく一人酒
 心太は危険思想だから美味
 正義だと信じゲバ棒青い頃
 しなやかに生きたしソーマンはピンク
 停止線止まったままにいる思想
 責任は自由に生きる中にある
 思想家も恋をしました人並みに
 もし思想が漏れたら怖い満員電車

松島きよみ
 東尾由子
 岩原一角
 山野寿之
 松谷由夏
 小林満寿夫
 井澤壽峰
 佐野正邦
 信子
 波部珀兎
 堀内きみ子
 秋田あかり
 信子
 井澤壽峰
 青空
 直子
 春田敏晴
 浜脇蓬生
 春田敏晴
 美代
 秋田あかり
 林ともこ
 堀内きみ子
 久世高鷲
 浜脇蓬生

3点

4点
 5点

6点

7点

8点

9点

11点
 得点があるものをすべて点数順に掲載しています。
 得点が空白のものは前行の句と同得点です。

人類よ謝る思想常に持て
 トランプに自由の女神横を向き
 人は人比べることの無駄を知り
 思想などめぐらす閑がない火宅
 百均の思想パートの使い捨て
 人類の無尽の知恵を咀嚼する
 思想には遠くのんびり茶を啜る
 ちくわの穴に思想ひとつを埋めてみる
 レントゲン写らぬ思想ひっそりと
 継続の力信じてスクワット
 溶けてゆく思想 コロンブスの卵
 哲学も恋の前では役立たず
 ORコードの思想舐めても齧っても
 丸善の棚に檸檬という思想
 思想などありませんと鶴と亀
 主義主張異なるけれど馬が合う
 ハーバード思想の自由崖つぷち
 貫いて見れば周りに友はなく
 わたくしの思想を詰めた旅靴
 左でも右でもなくてど真ん中
 武智三成
 加山勝久
 青空
 小林満寿夫
 山野寿之
 蔵内歳重
 林ともこ
 浜知子
 船木しげ子
 松島きよみ
 平川柳
 久世高鷲
 浜知子
 真鍋心平太
 平川柳
 三枝なな
 加山勝久
 美代
 直子
 真鍋心平太

お題 「文学」 短句

互選

1点

2点

3点

芥川よりコナンが流行る
一杯のお茶これも文学
二進法です明日の文学
咳して一人詠んだ文学
文学の旅名句名文
名前はないが吾輩は猫
天守閣にも上る文学碑
おさげの似合う文学少女
深刻に読むロシア文学
一体どっち川柳俳句
本は好きだが文学わからず
異論反論漫画全盛
万智ちゃんはその気にさせた歌
文学の味語彙の豊かさ
苦界浄土の俺もニンゲン
文学少女小脇にポエム
指を折るとき我文学者
自分史未写完書いては破く
文学少女日々スマ木漬け
相田みつをに癒され生きる
何も知らない文学博士
思考回路が文学を拒否
友よ待ってるメロス直行
同行二人砂の文学
怪談読んで夜におびえる
アクセサリーに文学を読む
ハイネに出逢う文学の森

松谷由夏
直子
春田敏晴
真鍋心平太
堀内きみ子
久世高鷲
小林満寿夫
松谷由夏
加山勝久
松島きよみ
浜脇蓬生
三枝なな
秋田あかり
井澤壽峰
平川柳
林ともこ
蔵内歳重
松島きよみ
東尾由子
青空
東尾由子
美代
浜知子
真鍋心平太
武智三成
船木しげ子
山野寿之

4点

5点

6点

7点

8点

螢狩りする夢二の末裔
歳を重ねて走れぬメロス
好きな作家の飽きぬ文字列
僕の恋文僕の文学
万葉集に馳せるいにしえ
明日のジョーは僕の文学
文学愛し太宰にかぶれ
小説と酒連れひとり旅
文学論もあんみつも好き
哲学も恋の前では役立たず
オマコートの思想舐めても齧っても
丸善の棚に檸檬という思想
思想などありませんと鶴と亀
枕代わりに文学全集
一読もせず全集売られ
読んで忘れる読まず忘れる
人間を問う金閣寺の火
羅生門から飢餓の文学

小林満寿夫
美代
信子
直子
堀内きみ子
春田敏晴
波部珀兎
山野寿之
林ともこ
久世高鷲
浜知子
真鍋心平太
平川柳
浜脇蓬生
三枝なな
久世高鷲
武智三成
船木しげ子

今月の投句者(27名 敬称略)

井澤壽峰 加山勝久 蔵内歳重 春田敏晴 松島きよみ
山野寿之 岩原一角 信子 武智三成 小林満寿夫
平川柳 三枝なな 林ともこ 美代 真鍋心平太
秋田あかり 久世高鷲 直子 松谷由夏 青空
船木しげ子 波部珀兎 浜脇蓬生 堀内きみ子
佐野正邦 東尾由子 浜知子

皆様ご参加、ご協力ありがとうございました。

川柳天守閣 連載 評論「現代川柳の詩学」を考える ⑮

明治の「新傾向俳句」と「新傾向川柳」の誕生

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳（東京川柳会主宰）

明治四十年代になると、俳句界では「新傾向俳句」が台頭し、川柳界の若い川柳作家にも大きな影響を与えました。

「新傾向俳句」は一九〇八（明治四十二）年二月、「アカネ」誌上に発表された大須賀乙字（一八八一・一九二〇）の俳論「新俳句界の新傾向」に端を発します。翌（一九〇九）年には河東碧梧桐が『日本及日本人』（二月号）に「俳句の新傾向に就いて」を発表。この俳論で河東碧梧桐は俳句の季題を脱して、人間の内面を描写していかうとする「新傾向俳句」を提唱しました。河東碧梧桐のよく知られ句に次の俳句があります。

赤い椿白い椿と落ちにけり

碧梧桐

思はずもヒヨコ生れぬ冬ふゆさうび薔薇

碧梧桐

一九〇九（明治四十二）年四月に中島紫痴郎（一八八二・一九六八）は川柳誌『矢車』（第一号）を仲間と共に創刊。その第一号で「川柳を詩にしたい。詩は時代の要求である」と「詩としての川柳」を宣言。これは「青春的主観」を「新式短詩」の「新川柳」で表現していかうとする二十代の若い川柳作家の第一声でした。中島紫痴郎の「新傾向川柳」には、次のような句があります。

何となく明るい町へ行きたき日 紫痴郎

眼の無い魚となり海の底へと思ふ 紫痴郎

この明治四十二年には他に浅井五葉（一八八二・一九三二）、森井荷十（一八八五・一九四八）、川上日車（一八八七・一九五九）、小島六厘坊（一八八八・一九〇九）、麻生路郎（一八八八・一九六五）、木村半文銭（一八八九・一九五三）などが二十代の若い川柳作家たちでした。川上三太

郎（一八九一・一九六八）は、まだ十代の青年でした。

川上三太郎は一九一〇（明治二十三年）五月、一時、「眉愁」と称していましたが、すでに十代の頃から『矢車』で「新傾向俳句」の論客として活躍していました。

三太郎は「僕はあらゆる客観を排する者である」とし、「主観の川柳」は「実感中より得た」

こせい

「箇性的主観」の表現であると「川柳主観論」を展開し、「新傾向川柳」は「主観川柳」であると論じました。三太郎は一九〇四（明治三十七）年、十四歳の頃、川柳をはじめ、井上剣花坊の柳樽寺川柳会に所属していました。

柳樽寺川柳会の創設に参加した高木角恋坊（一八七六～一九三七）は『川柳』編集を担当。明治の「新川柳」運動の推進者のひとりです。彼は読売新聞川柳研究会機関誌『滑稽文学』（第四卷第六号）に「主観と川柳」という文を寄せ、「古

川柳」にみられる歴史的な〈客観性〉を否定し、「新川柳」は「主観句の本拠に基礎」を定め、「新しき旗幟を樹立」すべきと説き、「川柳は詩なり、詩は主観を以て其本領」とし、故に「川柳は主観を本領」とする文学であると語ります。そして「新川柳」は「明治の新詩」であり、「純主観を暢ぶる詩」としての「立脚地を有する時代詩」であると主張しました。

柳樽寺川柳会の「新川柳」は明治三十年代には正岡子規の影響を受けた剣花坊が「大いに笑う文学」である「滑稽文学」の一分野として社会・風俗を描く「新短詩」が探究されましたが、明治四十年代に入ると、河東碧梧桐の「新傾向俳句」の影響を受け、高木角恋坊や川上三太郎は「主観」を核にした「純主観を暢ぶる詩」としての「新傾向川柳」を探究するようになりました。

（続く）

「喜寿」

真鍋心平太

六月例会の間に喜寿を迎えてしまった。七〇歳で腎臓を悪くしてこの七年の間に三回延べ八ヶ月も入院している身にとってはこんな日が来たことは望外の出来事であったのだが、その日の深夜一人で食卓の前に座り、罪状を告げられる被告のような後ろめたさを感じた。

罪状のひとつは父より長く生きたことである。父は私が一四歳のときに三六歳という若さで亡くなったのだが、叔父が亡くなる前こんなことを語ってくれた。

“お父ちゃんは中学に行きたくて土下座しながら父親に「一生の頼みや。上の学校に行かしてくれ。」と頼んでるのを見たことがある。父親はガラス職人で「職人に学問はいらんちゅうて、許さんかったんや。お父ちゃんは頭が良かっただけに悔しかったやろな。その姿が今でも忘れられん”

と。そんな父の倍以上の年月をながらえて、こうしている自分を父は今どんな目でみているだろうか。

もう一つの罪状は母と一緒に一度も旅行をしなかったことである。私が小学五年生のときのこと。母は学校のPTA主催の旅行に出かけていた。恐らく子供が出来てからは初めての旅行だったと思う。そんなときに私が学校で大怪我をしたため、母は出かけたその日に呼び戻され帰って来るしかなかった。そんな母といつかは一緒に旅行をしたいと思っていたのだが実現しないまま、母もまた五九歳という若さで亡くなってしまった。

母が亡くなってから四十年経った今、息子がときどき私たち夫婦を旅行に誘ってくれるという幸せにめぐまれていたのであるが。その嬉しさはひとしおではないだけに自分が出来なかったことが悔やまれて、私は机の前から動けなかった。

今年の梅雨は一時降り続いたあとこの日から一気に蒸し暑い真夏のような日が続いている。

第27回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「備蓄米」 岩原一角 選
「飛ぶ」 林とも子 選
「激しい」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「ユニーク」(短句) 互 選
(投句 各 2 句)

投句料 3 回につき 1000 円

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

投句開始 2025年7月9日(水) から
投句締切 2025年7月15日(火) まで
互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。
7月16日(水)～7月19日(土)
披講発表 7月20日(日) から随時閲覧可能になります。

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。

<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから



投句・閲覧



会員登録

鉛筆画

今月はお休みです。

携帯 080 (2672) 4446
Tel・fax 077 (532) 4211

川柳天守閣

サンルシエル大津607号室

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

TEL 520-0054

(事務所)

(編集人 真鍋心平太)

(発行責任者 真鍋心平太)

ウェブ川柳天守閣会報

二〇二五年六月二五日発行